

＜書を持って街に出よう＞

方法としてのフィールド「京都の在日韓国朝鮮人企業」 調査の研究上の位置づけー

韓載香

・仮説の発見

フィールド調査は、どちらかといえば、苦手である。事実発見の楽しい現場までとはいえなくても良いが、やらなくても良いならしたくない、と思っている苦痛な経験である。最初は、言葉の問題もあった。情報収集上の制約を感じざるを得なかったからである。より根本的な二つの理由があった。一つは、性格の問題である。人とのコミュニケーションが億劫である。主観的な苦手意識に過ぎないなら、精神的に克服すればよい。しかし、聞き手の緊張感は、相手にも伝わる。和やかな雰囲気作りができず、結果的に聞き取り調査内容の質を落とすことになる。もう一つの理由は、フィールド調査によって得た情報が、そのままでは客観的なものにならないことに関連する。一般的に、インタビュー内容は個人の経験に基づくものである上に、聞き手の手腕によるところが大きく、歴史分析のための議論に耐えられる資料として、1 次文献に比べて限界を持っている。その問題を小さくし、学問的に認められる調査にするためのノウハウも、分析できる能力も持っていなかった。

そのようなフィールド調査を主要な方法とし、そこから得られた知見に基づいた「京都繊維産業における在日韓国・朝鮮人企業」（『在日企業』の産業経済史—その社会的基盤とダイナミズム』名古屋大学出版会、2010 年の第 2 章）は、結果からみると、全体の研究を大きく前進させたことになった。というより、同調査と論文がなければ、その後の研究はなかったと言っても過言ではない。研究の一つの柱となり、枠組みを作る第一歩となる土台が、そこで作られた（もっともこのような位置づけは、その後に続く論文によって少しずつ明確になった。調査当時、論文を書き上げた後も、すぐはわからないものであった）。

・資料の限界

修士論文の一部である「戦後の在日韓国・朝鮮人経済の産業動態」（前掲書、第 1 章）は、在日韓国・朝鮮人（在日）の企業名鑑の集計結果をまとめたものであり、研究の出発点となった。そこでは、在日の産業構造の歴史的特徴が見出された。次の課題は、特徴を生み出した要因を説得的に説明することであった。しかし、適切な資料が見つからず、研究は足踏み状態にあった。資料は伝記、回顧録など、ほとんどが 2 次文献であり、同時代に記録された文書も、調査報告も殆どなかった。個人の思いに基づいた伝記などの回想には、ある仕事に就くまでの説明はあっても、具体的な企業経営についての記述はなかった。そのような

個人的な経験を、在日全体の特徴を説明できる客観的事実として位置付けることはできなかった。個人と民族全体の間をつなぐものは何か、企業名鑑の集計結果の数字の意味を理解可能にする枠組みが必要であった。

京都の在日企業の調査は、そのような行き詰まりの状態のなかで始まった。中野先生の退官を記念した論文集刊行企画の一環である、岡田先生編集の『京都経済の探究 変わる生活と産業』（高菎出版、2006 年）の出版に参加することになった。京都の在日の産業構造の変化に注目することになり、題材の選定に悩むことはなかった。しかし、京都については、既に最初の論文で明らかにしており、次のステップは、既述のように、要因分析であった。

・方法論の模索

京都の代表的な産業—織物と染色—に注目し、その産業の歴史と、在日企業のあり方を対照することから始めた。前者については、基礎的な統計資料、組合名簿、組合史などにあたった。後者については、ほとんど資料がないため、協力をいただいた 8 社に対してインタビュー調査を行った。見通しがあつてのことではなかった。他に方法がなかった。

インタビューの流儀もなく、計画的でもなかった。良い調査をするためには、事前の準備が重要であることも、後でわかった。在日企業は特定の工程に集中しているため、関連文献も殆どなく、調べる方法も知らなかったという切実な問題もあった。

調査は、そのように行き当たりばつたりのかたちで始まった。ただ、実際にしてきた仕事、取引先との関係について、具体的な出来事を必死に聞きだした。伝記などでの記述では、行動やその結果を、抽象的な思い、心情から事後的に説明する。インタビューでは、置かれた状況、与えられた選択を推測するために、日常的に行うルーティン的な仕事と、危機などの特殊で具体的な出来事を区分して説明していただいた。こうして集められた事実の寄せ集めのなかには、興味深い発見もあった。しかし、そのままでは論文にはならなかった。多様な人々のバラバラな経験をどのようにつなげればよいのかわからなかった。聞いた話が無駄にみえ、面白いと「ちっとも」思えなくなった。

・予想に反する事実への敏感さと他人との議論

ある事実がどうしてもよいことになったり、同じことが反対に重要な情報源になったりする。その境目を決めるのは、評価、解釈の力であろう。ただし、そのための分析過程は 1 人作業ではない。

京都の在日の調査を通じて印象深かったのは、「朝鮮総連（北朝鮮を支持する民族団体）系と、民団（韓国支持）という異なる政治的立場は、ビジネスの取引に影響しない。個人的な付き合いにおいても、それほど重要ではない」という反応であった。調査前の先入観を覆す事実であった。

軍事政権のもとで反共教育を受けた世代として、小さい時は、肋骨を露わにした衰弱した北朝鮮の民衆たちは、角の生えた真っ赤な悪魔の顔をした共産党員に搾取される、と信じていた。平和な日本からみると、単なる笑い話に聞こえるかもしれないが、例えば北朝鮮の人に接触するとスパイとして疑われるという時代もあった。だから、在日社会も、対立する政治団体を支持する人々の間には、目に見えない壁があると思っていた。しかし、取引で問題になるのは、加工賃の高低、品質や納入に係る信頼であった。朝銀、商銀など異なる政治路線の金融機関と取引する背景には、金利が安い、融資規模が大きい、同じ民族である、という判断があった。ずっとそうだったか、変化してきたか、個人・地域によって違うのか、様々な疑問はあったが、対立的なイデオロギーに基づいた社会関係は反共教育を前提にしているから、まずはそうしたことが在日社会において徹底されたかを考えるべきだと感じた。いずれにしても、予想外の事実であったことには変わりなかった。

面白いと思えた理由は何か。ある種の観念、先入観に反する事実ということにあったように思う。もっとも、それらは、そのまま意味のあるものには思えなかった。なぜそうかという説得的な説明の中ではじめて客観的な史実になる。どうすれば良いのか。

ある日、岡田先生に、「細かい話は興味深いですが、在日としての共通点が見えません。何も関係ないようです。だから民族で括ってみる意味がありません。北系（北朝鮮）か南系（韓国）か、国籍も重要でない、ビジネスは民族コミュニティと関連していません」と呟いた。事実のさばき方がわからず、諦めかけていた。そうすると、先生は、「本当に関係がないの？ 関係ないのは面白いね」という反応。

それが次に繋がった。

事実を丁寧に整理してみると、例えば西陣織の S 社は、「始まり」では親戚からの情報提供が直接的な動機でもあり、基盤にもなった。しかし、開業後、取引や情報入手において在日はほとんど登場しなかった。すなわち、他の在日との関係（＝民族コミュニティ）は、最初からなかったわけでも、変わらずあったわけでもなく、企業誕生からある時期まで重要であると理解できたのである。そうしたコミュニティとの関連の変化が、在日企業の行動の特徴を説明する仮説として、その後の研究の枠組みになった。

行き当たりばつりの試行錯誤から見えてきた自分なりのやり方は、面白いと直感的に感じた事実を見分け、それを他人との議論を通して相対化することであった。分析者しか掴めない直感から始まったが、より重要なのはその理由を探ることであった。京都というテーマからいえば、京都の在日という特殊性それ自体が重要になる。それを在日全体の見取り図のなかに置く際には、京都と繊維産業という特殊性を取り除き、京都に体现された在日の特徴を発見する作業が必要であった。その過程は、気が遠くなる繰り返しの作業である。しかし、そうした宝物探しはフィールドでしか始まらないこともわかった。

フィールド調査に対しては、性格からくる苦手意識は今なお克服できていない。しかし、細かい事実に敏感になることと、全体との関連に関して他人との議論を怠らなければ、フィールドのメリットを活かせると思うようになった。気付くのが遅いのだが。

（東京大学大学院経済学研究科附属経営教育研究センター）